

津山から倉敷へ 移転の経緯



Kurashiki Sakuyo University 40th Anniversary



津山から倉敷へ

移転の背景



学長 松田 英毅



津山から倉敷へ

I 移転の背景

昭和50年代に入り、大学入学年令の18才人口や高校入学年令の15才人口が急減期に入るとの予測がなされ、本学においても対応策が検討された。一つには、本学園は高校、短大、大学と三つの学校を擁しているが、高校、短大は学園経営の核にはなりえない。二つには、短期大学は、従来型の女子教育を中心とした学科構成では社会のニーズに対応できない。高学歴社会に対応し、大学への改組を考えるべきである。三つには、これからのわが国は、経済指向がさらに強まり、より実学的で実践教育を受けた人材が求められる。四つには、津山市は音楽に限らず学生の集まりにくさや、大学教員の勤務地としては東京、関西から不便であることから適当とはいえない。以上のことから、学園の安定した経営基盤を確保し、将来にわたり社会の要請に応える教育をしていく上で、①大学を中心とした学園創りを行う ②そのことが可能な地に移転する ③これらの事業が遂行可能な組織創りを行う。との方針をたて、このような方針のもとに、岡山市矢津に土地を購入し大学移転地に決め、まず最初に短期大学情報処理学科を昭和62年に開設し、同時に事務組織の改編、編入学定員設定等を行った。一方、倉敷市では平成4年に大学の誘致を公約の一つとした渡邊行雄市政が誕生した。その白羽の矢の一つが本学に当てられたのである。倉敷市は大原美術館を中心に芸術文化の街と水島コンビナートを擁する工業都市として全国

的に知名度が高く、本学の将来計画を遂行する上で倉敷市の立地と環境は魅力的なものであった。平成4年12月に倉敷市と本学の間で同意された移転に関する内容は倉敷市より約5万坪の校地の提供と50億円の補助金の交付である。校地はJR新倉敷駅の北約1キロメートルの位置にある。本学は初年度に音楽大学と短期大学音楽科を全学年移転する。続いて短大の定員を大学に移し新学部を増設し、学生総数1,800名のキャンパスをつくる。補助金の6倍の資金を投入し施設の整備を含めた移転事業を完成することなどであった。当初この移転資金には移転後の津山校地と岡山校地の売却収入を当てる予定であったが、バブルがはじけ、日本経済が急激に冷却し、校地の売却が殆ど不可能になったため資金の目途がつかなくなり、急遽移転事業を見直し、倉敷市の要望を満たした上



で事業費を半分に減ずる案で議会に理解を求め了解された。

II 移転に対する激励

倉敷市と移転交渉がまとまり、理事会で正式に倉敷移転を決議したのは平成4年12月12日であった。移転を成功させるには越えねばならない多くの問題があった。その一つは学生の大半が世話になってきた地元のアパートの管理者の同意であった。学生たちにアパートを提供して生計をたて、学生をわが子のように面倒を見ていた家主からは大反対の声が当然予想された。ところが予想に反し反対の声は意外に小さかったのである。それどころか「目の前から作陽が無くなることは悲しいし、つらいことです。私たちが作陽の今日の発展を支えてきました。作陽は私たちの誇りでもあります。その作陽が県南に出ると決断したのなら、移転を成功させ頑張ってください。」という声まであり、驚くと同時に大いに励まされたのである。



鶴山公園（津山市）

申し入れた。アパート経営者の次に利害関係にある人たちであり、それも当然予想されたことであった。全く予想していなかったのは学園とは無関係の多くの市民から移転に対する励ましの手紙が寄せられたことである。津山の人たちの心の奥の深さを実感した。

III 移転の特徴

当時は全国でかなりの数の大学移転の計画があったが、多くは実現されなかった。成功の例の殆どは大都市から地方の小都市への移転であったが、本学の場合は地方（小都市）から都会（中都市）へ出る特異な例であった。

普通の移転の場合、新入生より徐々に新キャンパスに移し、スムーズに移転を行うものである。しかし本学の場合は音楽大学と短大音楽科の全ての学生を同時に移転させた。

人口約9万の津山市から小規模とはいえ大学と短大が一度に移転するため大きい影響が予想された。

倉敷市より校地と移転事業費の一部の補助金を受けた。

この移転は奇跡のプロジェクトと呼ばれた。決定から移転まで3年数ヶ月しかなく、この間に土地の買収、家の立ち退き、校地造成、キャンパス設計、施工業者の選定、建物の完成、校具備品の運搬、アパートの準



今津屋橋（津山市）



津山時代の
アパートの写真
(1985年)

本学は昭和50年代の後半から南へ出る決意を秘かに固めていた。作陽音大や短大が津山市に存在することにより市にとってどれほどの経済効果があるのか不明であったが、移転することにより経済的にもその他の面でもかなりのダメージを与えることが予想されたので、津山市の政財界の主な人たちには、それとはなしに大学は18歳人口減により大学の経営難が予想され転出せざるをえないこと、そのため市がダメージを受けないように善後策が必要ではないかと説明して回ったが、移転することを誰にも本気にしてもらえなかった。正式に移転が公表されると、市や商工会議所の人たちは倉敷市へ誘致反対を

備、住居の移転等がなされた。校地予定の山林は200名以上の持主があり、その上大学に接続する県道建設のための家の立ち退き、移転等の折衝に市や県の担当者は夜を徹して当たった。キャンパスの設計は日本を代表する建築家である吉村順三氏に依頼した。これは、津山で予定していたオペラホールの設計者であり、その建築が着工直後から一部市民の反対で完成を断念したと氏が日本人の心や自然を重視する建築家であり本学の教育理念に良くあっていることがその理由であった。施工業社を募ったところ20数社集まった。競争入札には全社参加してもらうことにし、工区を5ブロック（最終的には3ブロック）に分け、各ブロックに、大、中、小業社を配しそれぞれに競争入札をした。これで施工費を標準費用の3分の2くらいに圧縮することができた。

IV 移転に寄せられた善意

移転ができた大きな要因の一つに前述のような津山市民の理解と励ましがあった。それに受け入れの倉敷の人

たちについても同じであった。校地になった土地は200人ほどの所有者があり、一人でも反対があれば開発と造成はできなかった。又、新倉敷駅方面から大学を通り山陽自動車道玉島インターに抜ける道路は大学ができると同時に造られたものであり、それ以前は1メートル幅の畦道であった。周辺には多くの民家があったのを立ち退きして造られたのである。先祖伝来の土地や家を手放すについては相当の決断があったに違いない。それをなさしめたのは本学への期待であったであろう。大学の開学は平成8年4月1日であったが、その前日、小雨の降る中を、大学周辺の住民、小さい子どもから老人までと市の当局の人たちおよそ100名で記念の植樹をしていただいた。移転に際して両市の間で若干の齟齬があったことから、津山で育った作陽が倉敷において両市の友好の中でさらに発展するようにとの願いから、津山で採れたどんぐりの実と、倉敷で実ったドングリの実を市の職員の有志の人たちが10センチほどの苗木にしたものが手植されたのである。大学食堂と練習棟の北側にある「倉敷の森」「津山の森」がそれである。

聖徳殿（津山）



移転前の作陽音楽大学（北面）
(1985年・津山市)

移転前の作陽音楽大学（南面）

V 移転を成功に導いたもの

前にも述べたが移転事業は多くの難関を越えねば成功しない。本学は全てを無事にクリアして移転できた。その最大の要因は何だったのであろうか。それは音大の卒業生であり、在學生であり、先輩の教職員であると思われる。短大の幼児教育学科や家政学科の卒業生についても同様である。あまり派手ではないが誠実で真面目にそれぞれの地域で地道に活躍し、その評価も高かったからであろう。又そういう卒業生や在學生を教え育てた当時の教職員と校風、それらが統合され作陽の評価となり倉敷市を動かす、津山や倉敷の市民の理解と協力につながったと思われる。

VI 移転目的達成のために

移転の目的は、少子化時代に生き残り、明るくいいきと生きる作陽精神を持った学生を育て輩出することにより社会貢献することにある。21世紀は物の時代から心の時代に変わらねばならないと言われている。心豊かな社会を築きうる人材の育成が本学の使命である。移転により立地条件、施設設備は完備され、地域にも馴染んで飛躍の環境は整えられた。大学40周年を機に学部、学科の再編、整理を行い、全学あげて生き生きとした明るい大学づくりを行い多くの期待に応えご恩に報いたい。

移転新設工事

平成7年2月6日～平成8年2月29日

ここでは平成7年2月から約1年かけて建設した新校舎の
建築風景を、各エリアごとに紹介しています。

KURASHIKI SAKUYO UNIVERSITY
Construction photograph

正面階段



交流広場



1号館 (音楽学部棟)・2号館 (短期大学棟)



正面玄関前



1号館



2号館



3号館 (聖徳殿)



渡り廊下



4号館 (練習棟)



5号館 (食文化学部棟)・8号館 (図書館)



7号館 (学生ホール)



9号館 (体育館)



屋外音楽堂



県道・駐車場



現在の学園風景

倉敷キャンパス俯瞰図



倉敷キャンパス平面図



1996年に、1号館、2号館、3号館（聖徳殿）、4号館、7号館、9号館が完成、2002年までに5号館（食文化学部棟）、8号館（図書館）、6号館（食文化学部新棟）、10号館（藤花楽堂）、11号館（音楽交流センター）が増築されました。